

ディカーニカ近郷夜話 前篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

イワン・クパーラの前夜（×××寺の役僧が話した事実譚）

青空文庫

フオマ・グリゴリーエキツチには一種奇妙な癖があつた。あの人はおなじ話を二度と繰りかへすのが死ぬほど嫌ひだつた。どんなことでも、もう一度はなして貰ひたいなどと言はうものなら、きまつて、何か新事実をつけ足すか、でなければ、まるで似ても似つかぬものに作りかへてしまふのが、いつもの伝でんであつた。あの時のこと、一人の紳士が、——とはいへ、われわれ凡俗にはあつた人たちをいつたいどういつて呼ぶべきかが既に難かしい問題なんで、戯作者かといふに戯作者でもなし、いはば定期市ヤールマルカの時にこちらへやつて来る、あの仲買人とおんなじで、矢鱈無性に掻きよせて、何なにかに彼の差別なく一手に引き受け、剽窃の限りを尽

してからに、ひと月おきか一週間おき位に、いろは本より薄つぺらな小冊子を矢継ぎばやに発行するといった手合なんだが——さうした紳士の一人が、他ならぬこの物語をフオマ・グリゴリーエキツチから聴きこんだ訳だが、フオマ・グリゴリーエキツチの方はもう、そんなことはとづくに忘れてしまつてゐたのぢや。ところが或る日のこと、ポルタワから、他ならぬその紳士が豌豆色の上つ張りを著こんでやつて来たのぢや——この仁のことは、いつかお話したこともあるし、当人のものした或る小説は諸君もすでに一読されたことだらう——とにかく、やつて来るなり、この先生、小さな本を一冊だして、その中ほどを開いてわれわれに示したものぢや。フオマ・グリゴリーエキツチはやをら眼鏡を引きよ

せて、鼻へ掛けようとしたが、それに糸を巻きつけて蠟で固めておくことをつい忘れてゐたのに気がつく、その本をわたしの方へさし出したのぢや。わたしは、これでもまあどうにか読み書きも出来るし、眼鏡をかけるにも及ばないので、さつそくそれを受けとつて読みにかかつたといふ訳さ。ところが、ものの二枚とははぐらないのに、あの人はいきなり、わたしの手を押へておしとどめたものぢや。

「ちよつと待つて下され！ まづ初めに、いつたい何をお読みになるのか、それを一つ伺つておきたいものぢやて。」

正直なところ、そんなことを訊かれてわたしは少々あつけに取られた。

「何を読むですつて、フオマ・グリゴリーエヰツチ？ あなたの

お話ですよ、あなたが御自身でなすつた物語ぢやありませんか。」

「いつたい誰がそんなものをわたしの物語だと言ひましたんで？」

「論より証拠ぢやありませんか、ここにちやんと刷りこんであり

まさあね、なにそれ 役僧某これを物語る と。」

「ちえつ、そんなことを刷りこみをつた奴の面に唾でも引つかけ

ておやりなされ！ モスカーリ 大露西亞人の畜生めが、嘘八百で固めをる！

誰がそんな風に話すもんですかい？ まるで籜のゆるんだ桶み

たいな、ぼんくら頭の野郎ぢやて！ まあお聴きなされ、それぢ

やあ、改めて一つその話をいたしませう。」

われわれが卓子へすりよると、彼は次ぎのやうに語りはじめた。

わしの祖父といへば、（どうか、あのひとに天国の恵みがあり
 まするやうに！　またあの世では小麦粉の白^{ブハニエーッ}麵麩と、蜂蜜をつ
 けた罌粟^{マーコフニク}餡麵麩ばかり鱈腹食べてをりまするやうに！）いや実に
 話上手な人ぢやつた。よく祖父が話をはじめると、まる一日ぢゆ
 う席を立たずに聴き入つても飽きなかつたものぢや。とてもとて
 も、今時の道化どもが口から出まかせの嘘八百を、ものの三日も
 飯を食はなかつたやうな舌まはりでやりだしたが最後、さつそく
 帽子を掴んで^{おもて}戸外へ飛び出さずにあられないといつた、あんな手
 合とは、てんで比べものにもなんにもなつたものぢやない。今も
 まざまざと思ひ出すのは、亡くなつた老母がまだ存命ちゆうの頃
 のことだな——戸外^{そと}では酷^{マローズ}寒がびしびしと音を立てて、自宅^{うち}の

狭い窓をこちこちに凍てつけるやうな冬の夜長の頃、母はグレーベ麻

梳ニの前で長い長い糸を手繰りだしながら、片方の足でゆりかご揺籃を

ゆすぶりゆすぶり、子守唄をうたつてゐたつけが、その唄声が今

もわしの耳の中で聞えてをりますわい。油カガニエツ燈はなんぞに怯え

でもしたやうに顫へてパチパチと燃えながら、うちの中のわした

ちを照らしてゐる。紡つむ錘はビイビイと唸つてゐる。そこでわした

ち子供一同は一塊りに寄りたかつて、老いこんでもう五年の余も

煖ペチカ炉から下りて来ない祖父ぢぢいの話に聴き入つたものぢや。したが、

遠い遠い昔の物語や、*ザポロージエ人の遠征、波蘭人の話、さ

ては*ポドウコーワだの、*ポルトラ・コジューハだの、*サガ

イダーチヌイだのの武勇談、さういつた風な昔語りよりは、どち

らかと言へば、何かかう、古めかしい怪異物語の方にわたしたちはずつと牽きつけられたものぢや。さういふ妖怪変化の話を聴くと、いつもからだ軀ぢゆうがぞみぞみして、身の毛もよだつ思ひだつた。さもなければ、さうした怪談の怖さがたたつて日の暮れあひからは、眼にうつるものが皆、あやしげな化生のものの姿に見えたものぢや。どうかした拍子で夜分、うちを空けでもすることがあると、必らずそのあひだにあの世から迷つて来た亡者がわが寢床にもぐりこんでゐはせぬかと、無性に気づかはれてならなんだ。いや、まったくの話が、自分の寢台の枕もとにおいてある長スエートカ上衣を遠くから見て、てつきり悪魔がうづくまつてゐるのぢやないかと思つたことも再々のことでは、それが嘘なら、こんな話を二度

と聞かせるをりのない方がましなくらゐぢや。祖父の物語でいちばん肝腎かんじんかなめ要かなめなところは、祖父が生涯に一度も嘘をつかなかつたといふ点で、祖父が物語るかぎり、それはまさしくこの世にあつた真正銘まことの話に違ひなかつたのぢや。

ザポロージエ人 ドニエープルの急流にある島嶼をザポロージエと言ひ、そこにカザツク軍の本営（セーチ）があつたので、当時この本営附のカザツクをザポロージエ人と呼んだのである。

ポドウコーワ 土耳其人に殺されたモルダキヤの太守の弟だと詐称し、カザツクを利用して一時モルダキヤの王位に即いたが、後ワルシヤワで捕へられ、一五七八

年に処刑された人。

ポルトラ・コジューハ これは『皮衣一枚半』といふ意味の、如何にも小露西亞人らしい滑稽きはまる渾名であるが、果して実在の人物か仮装の人か不明なるも、恐らく波蘭に対するウクライナ解放運動に活躍せし英雄ならん。

サガイダーチヌイ（ピョートル・コナシエーキツチ）

一六〇六年よりザポロージェ・コザツクの総帥となり、土耳其やクリミヤを攻めて勝利を得、波蘭王ウラヂスラフ四世の莫斯科進撃に味方した人。一六二二年歿。

では、これから祖父の怪異譚のひとつをお話することにしよう

う。よく公事くじの代書などを勤めてをるやうな御仁で、今様の通用文はすらすらと読めもするが、ありふれた経文の一つもあてがはれうものなら、さあ頓と一字一句だつて会得ができず、その癖、何かといへば人を嘲るやうに白い歯を剥き出して笑ふだけが能といつた、まことにお伶俐な方々を見受けるもので、さういふ手合には何を話しても、ただもう、にやにや笑つてゐるばかりでな。実に、時世時勢ときよじせいとでもいふのか、何ひとつ真まに受けるといふことが無くなつた！ 近い話が——これあもう、天地神明に誓つての話ぢやが——あなた方にしてからが、ほんたうにはなさるまいけれど、ある時、ちよつと*妖ウエーヂマ女ウエーヂマの話をしたところ、どうぢやらう？ ひどい悪党もあつたもので、妖ウエーヂマ女ウエーヂマを信じをらぬのぢ

や！ お蔭でこの年になるまでには、こちとらが嗅煙草を嗅ぐよりもたやすく懺悔僧にむかつて嘘八百をならべ立てるやうな不心得な外道にもよく出会つたものぢやが、そのやうな輩やからでも、妖ウエー女デマの話が出れば、鶴亀々と十字を切つたものぢや。したが、そんな手合には勝手にさせておくがええ……口にするのも穢らしい……。何もかれこれ言ふがものはないぢやて。

妖ウエーデマ女

悪魔に身をまかせて神通力を得た女、人間に害悪を加へると言ひ伝へられる迷信的な存在。

さて、ものの百年も前には、死んだ祖父ぢぢいの話では、こんな村など、誰ひとり知つてゐる者は無かつたさうぢや。村とはいふものの、途方もなく惨めな部落だつたので！ 素地きちのまままで何も塗つ

てない丸太小屋が十軒ほど、そこここと原つぱのまんなかに剥き出しに突つ立つてゐたきりぢや。垣根もなければ、家畜や荷馬車を置くほどの、ろくろく満足な納屋ひとつない有様でな。それでもまだまだ贅沢な方で、こちとらのやうな裸か虫にいたつては、^{ぢべた}地面を掘りさげた^{つちむろ}土窖——それが人の住ひなのぢや！ ただ立ちのぼる煙を見て、そこにも神の子の住んでゐることが頷かれるといつたていたらく。どうして又そんな生活^{くらし}をしてゐたのぢやと言ひなさるのかな？ 貧乏のためかといふに、なかなか、貧乏どころぢやない。なんしろその頃といへば、猫や杓子までがわれもわれもと哥薩克になつて、他所^{よそ}の国々へ押し渡つて夥しい財宝を掠め取つてゐた時代でな、どちらかといへば、安住の家などを営

む必要が更々なかつたからぢや。当時は、クリミヤ人でござれ、
波蘭人リヤフでござれ、乃至はリトワニヤ人でござれ、どれもこれも世
界を股にかけて渡り歩いたものぢや！ そればかりか、時には自
国の者が徒党を組んで同胞から掠奪を擅ほしいままにすることさへあつたの
ぢや。いや、どんなこともあつた時代ぢやからな。

さてその頃のこと、この村へ時々ひとりの男、といふよりは寧
ろ人間の形に化けた悪魔が、姿を現はした。そいつはいつたい何
処から、何をしにやつて来るのか、だれ一人として知る者がなか
つた。遊興に耽つて、酒に酔ひしれてゐるかと思ふと、まるで水
の底へでも潜つたやうに、たちまち姿を掻き消してしまつて、な
んの音沙汰もなくなるのぢや。さうかと思ふと、まただしぬけに

天からでも降つたやうに、今でこそ跡形もないが、ディカーニカとはつい目と鼻のあひだにあつたその村の往還をすたすたと足ばやに歩いてゐるといふ始末なのぢや。そこでまたしても逢ふほどの哥薩克たちを残らず寄せ集めて、飲めや唄への乱痴気さわぎをおつぱじめで、ウオツカ 火酒は浴び放題……美しい娘つ子には、そつとすり寄るやうにして、リボンだの耳環だの頸飾だのを、もてあますほど呉れてやる！ 実は、美しい娘つ子たちも、さうした贈物を手にしながら、うすうす怪訝けげんに思ふのぢやつた——ひよつとこれは悪魔の手から出た代物ではないかしらとな。わしの祖父ぢぢいの親身の叔母が、そのころ今のオポシユニヤンスカヤ街道で居酒屋をやつてゐたが、そこでよく、このバサウリユーク

(その魔性の男は、さういふ名前だとほつてゐた)が散財をしたさうで、叔母の話したことには、この世にある限りのどんな幸しあは福せと引換でも、この男から贈物などもらふのは真平御免だったといふのぢや。だが、さうかといつて受け取らんわけにもゆかぬ——その男が針のやうな眉毛をしかめて、見るからに足のすくみさうな眼つきで額越しに睨まへると、誰だつてぞうつとして怯気おぢけを震つてしまつたものぢや。ところがまた、それを受けとらうものなら、次ぎの晩には頭に角のある、そいつの仲間が沼地からお客に押しかけて来るのぢや。そして、頸飾を掛けてをれば頸をしめる、指輪をはめてをれば指に喰ひつく、リボンを結んでをれば編くみがみ髪をひつぱるといふ始末でな。さうなつた暁には、それこそ、

かうした贈物は誠にもつて迷惑千万なのぢや！ しかも災難なことに——それを振りすてることも出来ないのぢや。たとへば水中めがけて投げこんだにもせよ、その魔性の指輪なり頸飾なりは、水面を泳いで、すぐに又もとの手もとへ戻つて来をるのぢや。

その村にお寺が一つあつたが、わしの記憶では、多分パンテレイ聖人を祠まつつた御堂だつたと思ふ。当時その寺に、今は亡きアフナーシー神父が住まつてをられた。神父は、バサウリユークが復活祭にさへお寺へ顔出しをせぬのを知ると、少し窘めて彼に懺悔をさせようと思ひついたものぢや。ところが、どうしてどうして！ 命に別状のなかつたのがせめてもの仕合せといふものでな。『へん、和尚さん！』と、そいつは喰つてかかつたのぢや。『他ひ

と人のことにかれこれ口出しをする暇に、われと我が身のことには氣をつけたがよからうぜ、さもないと、煮えつきの蜜飯クチャでその山羊の頸みたいな咽喉をふさいでこますから！』かういふ罰あたりにかかつては、なんともはや仕方のないものでな。アフアナーシイ神父はただひと言、このバサウリユークとつきあひをするやうな者は、誰れ彼れなしに、基督教会と人類全体の仇敵である加特力の信者と看做しますぞ、と断言したきりぢやつた。

さて、この村でコールジユといふ通称でとほつてゐた哥薩克の家に、親無しペトウローといふ渾名で呼ばれてゐる作男がひとりゐた。多分、だれ一人その男の両親を知つてゐる者がなかつたので、そんな渾名がつけられたのだらう。もつとも信徒總代の

話によれば、その両親は、彼の生まれた翌る年、黒死病ペストで亡くなつたといふのぢやが、わしの祖父の叔母はそれを本当にしないで、一所懸命に、この哀れなペトウローの身にとつては去年の雪ほどにも用のない肉親を捜し出してやらうとて、いろいろ骨折つたものぢや。彼女の話では、ペトウローの父親は今、ザポロージエにゐるが、前に土耳其人の捕虜になつて、むごたらしい艱難辛苦を嘗めた末、やうやく宦官の姿に変装して脱走して来たといふのぢや。だが眉の黒い娘つ子や新造たちにとつては、彼の肉親のことなどはどうでもよかつた。彼女たちはひたすら、彼に新調の波ジュパ蘭服リンを著せ、赤い帯をしめさせ、てつぺんだけが粹アストに青い仔羊ラハン皮の黒い帽子をかぶらせて、腰に土耳其風のサーベルをつり、

片手には鞭を、片手には美しい象眼いりの煙管パイプを持たせたものなら、とてもとても当時の若者といふ若者などは、その足もとへもよりつかれたものではなからうなどと、言ひそやしてゐた。しかし不幸にして、貧しいペトウローには、天にも晴はれにも掛換のない一枚看板の鼠いろの長スエーデン上衣トカより他には持ちあはせがなく、それも、気のきいた猶太人の衣囊かぶしの中にある金貨の数よりも多く穴があいてゐるといつた代物であつた。だが、それはまだしも大した災難ではなかつた。災難なのは、コールジュ老人に一粒種の娘があつて、それが素敵もない別嬪で、諸君にも恐らくこんなのは、なかなかおいそれとは見つかるものでないと思はれるほどの美人だつたことで。亡き祖父の叔母がよく話したことぢやが——とこ

ろで女にとつては、御承知のやうに、差しさはりがあつたら御免
 なされぢやが、他人ひとのことを美人などと云ふくらゐなら、いつ
 そ悪魔と接吻でもする方がよつぽど安易らくなはずぢやが——その哥カ
ザーチカ薩克娘のふくよかな頬が見るからに瑞みづみづ々々しくて、あのこよなく
 美しい薔薇いろの罌粟けしが神授めぐみの朝露で沐浴ゆあみををへて鮮やかに燃え
 ながら、きちんと行儀よく枝葉をそろへて、今し昇つたばかりの
 日輪に向つて美装を誇つてゐる時のやうに、あでやかなら、また
 その眉は、ちやうど当節の娘たちが、あの、箱をかついで村々を
 つて来モスカーリ悉露西亞人から、十字架につけたり、頸飾にする古銭
 を通すために買ふ、あの黒紐のやうに匂やかに、あだかもその明
 眸をさし覗くやうに、なだらかに弧を描き、小夜鳴鳥ナイチンゲールの唄声を

もらすために造られたかとも思はれるその可憐な口許は、それを見るたんびに当時の若者どもに思はず舌舐ずりをさせたもので、烏羽玉の黒髪は若^{わか}亜^あ麻^まのやうにしなやかに、（その頃はまだ、この辺の娘たちのあひだには、派手な色あひの美しい細リボンを編みこんだ幾つもの小さい編髪にするならはしがなかつたので）房々とした捲毛が、金糸で刺繡をした波蘭婦人服クントウーシユの上へ、ゆたかに垂れてゐたさうぢや。へつ！ このすつかり霜をいただいたわしが脳天どたまの古林と、まるで眼の上の瘤みたいに片わきに鎮坐まします山の神の婆あの前ではあるが、こんな娘を思ふ存ぶん接吻することができないほどなら、おお主よ、わしはもう頌歌席でハレルヤを唱へさせて貰ひませんでも結構ぢや。それはさて、かうして

若者と娘つ子とが互ひに朝夕顔を見あはせて暮してゐた日には：
 …それがどんな結末になるかは、火を見るより明らかかな話で、ま
 だ黎^{しのめ}明の頃ほひ、赤長靴の踵^{そこがね}鉄が目につけばそこには必らず
 ピドールカが情人のペトウルーシャと甘いささやきを交はしてゐ
 たわけぢや。しかし、つひぞそれまでコールジュが邪慳なところ
 を起すやうなことはなかつたが、ある時——これこそ他ならぬ悪
 魔のそののかしに違ひないのぢやが——ペトウルーシャのやつ、
 碌々あたりに注意もはらはらず、あとさきの考へもなしに、家の入
 口で哥薩克^{カザーチカ}娘に出会ひざま、その薔薇色の唇に、いはば無我夢中
 で接吻したのぢや。ちやうどその時、同じ悪魔めが、ええつ、ほ
 んに畜生め、靈験いやちこな十字架の夢でも見くさるがええ！——

—あらうことか、あの耄碌親爺に入口の扉を開けさせをつたのぢや。コールジュ老人は戸につかまつて棒だちになつたまま、開いた口も塞がらなかつた。その忌々しい接吻の音で彼の耳はすつかり聾になつてしまつたかとさへ思はれたのぢや。それは、まだ鉄砲も火薬もない当時のこととて、百姓どもが壁を叩いて野禽^{とり}を追ふのに使つた、木槌の音よりも大きく彼の耳に響いたものぢや。

我れに返るとともに、彼は、壁に懸つてゐた父祖伝来の鞭をおつ取りざま、哀れなペトウローの背筋をめがけてピシリと一つ撃ちおろさうとしたが、ちやうどその時、どこからかピドールカの弟で六つになるイワーシが駈けこんで来るなり、仰天して、いたいけな両の手で父親の脚にしがみついて、『お父ちゃん、お父ち

やん！ ペトウルーシャを殴^ぶつちやあ、いけないようつ！』と喚き出しをつたのぢや。どうしやうがあるものか？ 父親の心だとして木石ではない筈ぢや。彼は鞭をもとの壁に懸けて、やをら相手を扉の外へしよびき出すなり、『向後この家でおれの眼にとまつて見ろ、うんにや、そればかりか、うろうろと窓の下へでも近づいて見ろ、その時こそ、いいか、ペトウロー、おらがテレンチイ・コールジユである限り、誓つて、汝^{うぬ}のその黒い髭と、それからこの豚尾が——ほうら、もう耳を二たまはりも巻けるわい——これがどちらも汝^{うぬ}のど頭^{たま}から消えてなくなるんだぞ！』かう言ひざま、彼はすばやく拳をかためて、ペトウローの項^{うなじ}をがんと一つ喰らはせた。ペトウルーシャはくらくらつと目が眩んで、その場へ

ばつたり倒れてしまつた。とんだ接吻をして退けたものぢや！

恋人同士は切ない悲哀に胸とぎされてしまつた。ところがコール
ジユの許へはさる波蘭人で、ぴんと口髭を生やして、金絲で刺繡ぬひ
をした衣服を身にまとひ、長サーベル劍をつり、拍車をつけた男が、ま
るで寺男のタラースが毎日、会堂のなかを持ちまはる喜捨袋みた
いに、衣囊かかしをジャラジャラいはせながら、足しげく通ひだしたと
いふ噂さが、専ら村ぢゆうの評判になつた。けだし小意気な娘を
もつ父親のところへ、しげしげと出入をする手合の下心は見えず
いてゐる。さて或る日のこと、ピドールカは涙にかきくれながら、
両の腕に弟のイワーシを抱きしめて、かう言つたのぢや。『可愛
いあたしのイワーシや！ 好い子だからね、大急ぎでペトウルー

シヤのところまで一と走り行つて来ておくれでないか。そしてあのひとにさう言つておくれ。あたし、あのひとの鳶いろのお眼めめが恋しくて、あのひとの白いお顔が接吻したいのだけれど、でも前の世からの因縁でそれも叶はないのだつてね。あついあつい涙で、ぐつしより濡らした手拭も一筋や二筋ぢやない。あたしやせつなかつて、なんだか胸がしめつけられるやうなの。親身のお父さんでさへ、あたしには あだ仇がたき 敵もおんなしだわ——好きでもない波蘭人のとこなんかへ無理やりお嫁に行かせようとするんだもの。あのひとにさう言つておくれ、うちではもう婚礼の支度にかかつてあるのだけれど、あたしの婚礼には賑やかな音楽などはなくつて、コープザ八絃琴や笛の代りに補祭がお経をあげるのだつて、ね。そし

てあたしは花聾といつしよに踊るのではなく、棺に入れて担になつてゆかれるのだつて。あたしのお嫁にゆくところは暗い暗いお家なんだつて！——そして、屋根のうへには煙突の代りに楓の木の十字架が立つんだつて！』

あどけない子供がピドールカのことづてを片言で繰りかへすのを聴きながら、ペトウローはまるで化石にでもなつたやうにその場に棒立ちになつてしまつた。『ええ、情けない、おれはまたクリミヤか土耳古へでも押しわたつて、金銀をうんと分捕つて、しこたま身代を拵らへてから、お前のところへ歸つて来ようと思つてゐたのになあ、おれの別嬪さん。それもやつぱり駄目か。どこまでも、おれたちふたりは意地の悪い運命の眼まなこにみこまれてしまつ

たのだ。おれの方にだつてな、いとしい恋人さん、婚礼は挙げられるよ——おれの婚礼にやあ、坊さんがお経をあげるかはりに黒い鴉がカアカア啼くだらう。おれの家はだだつ広い野原で、蒼黒い雨雲が屋根の代りになるのだよ。驚めがおれの鳶めだまいろの眼球をつつき、哥薩克男子をのこのこの骨は雨露あめつゆに洗はれて、やがては旋風をのこの力でひからびてしまふことだらう。だがおれはどうしたといふんだ？ だれを恨み、だれに泣きごとをならべることがあらう？

所詮は神がかういふ運命に定められたのだ！ ええ、もう身も心も破滅してしまへばいいんだ！』さう言ふと、そのまま彼は居酒屋をさしてまつしぐらに飛んで行つたといふ。

祖父ぢぢいの叔母は、ペトウルーシャが自分の酒場へ、それも堅気な

人たちなら朝の勤行に詣つてゐる時分に、ひよつこり姿を現はしたのを見てちよつと驚ろいたが、彼が半樽の余も入りさうな大コップで焼酎シウハを注文した時には、まるで目のくり玉がとびだしさうなほど、相手の顔を見つめたものぢやさうな。この可哀さうな男はどうかしてその悲しみを払ひ落さうと思つたのだが、それは無駄なことだつた。火酒はまるで蕁麻いらくさのやうに彼の舌を刺して、
にがよもぎ苦蓬の汁よりも苦く思はれた。それで彼はその大コップを地べたへ叩きつけた。『悲観することあねえぞ、哥薩克！』さういふ胸間声が彼の頭のうへで鳴り響いた。振りかへつて見ると、そこにゐるのはバサウリユークだ！ いやはや！ なんとつらい醜顔ぢやらう！ 髪の毛はごはして、眼の玉がまるで牡牛のそれ

のやうぢや。『お主が何に困つてをるのか、それはちやんと知つとるぞ。そうら、これだらう！』さう言ひながら、彼は悪魔のやうな薄笑ひを浮かべて、帯のわきに下げてゐた革の財布をジャラジャラ鳴らした。ペトウローはぶるつと身顫ひをした。『へ、へ、へ！ どうだ、よく光るぢやらうが！』彼は金貨を手のひらへザラザラと移しながら喚いた。『へ、へ、へ！ どうだ、好い音がするぢやらうが！ かういふお錢ぜぜをたんまり儲けるのに、仕事といへばたんだ一つきりさ！』『悪魔！』と、ペトウローが躍起になつて叫んだ。『それをやらせてくれい！ おらはどんなことでもして退けるだから！』そこで手うちが交はされた。『見ろ、ペトウロー、お主はちやうどいい時に間にあつただぞ、明日あしたはイワ

ン・クパーラぢや！ 一年のうち今夜ひと晩だけ、蕨わらびに花が咲くのぢや。この期ごをはづしちやあならんぞ！ おれは今夜、真夜中に熊ヶ谷でお主を待つてゐてやる。』

恐らく、この日ペトウルーシャが夜になるのを待ち焦れたほどには、鶏も女房かみさんが餌を持つて来てくれる時刻を待ちあぐねはしなかつたらう。刻一刻に慄こらへ性がなくなつて、なん度となく戸外おもてへ出ては木立の影が少しでも長くならないかと、そればかり眺め眺めしたものぢや。なんといふ日の長いことだらう？ どうやら、天帝の定めた一日が、どこかへ尻尾を置き忘れて来たものとみえる。だが、やうやくのことで太陽の姿がなくなつた。空は一方だけが赤らんでゐる。やがてそれも薄暗くなつて来た。野原はひと

しほ肌寒くなつて、だんだん夕闇がせまり、そろそろ黄昏れたそがせめる。やれやれ、やつとのことで！ 彼は飛びたつ思ひで支度もそこそこに、足もとに用心しながら、鬱蒼と生ひ繁つた森の中を辿つて、熊ヶ谷と呼ぶ奥深い谷底へと降りて行つた。バサウリユークはもうちやんと、そこに待つてゐた。鼻をつままれても分らないやうな真の闇だ。二人は手に手をとつて、じめじめした沼地をば、深々と生ひはびこつた荆棘いばらにひつ搔かれたり、殆んど一足ごとにつまづいたりしながら、前へ前へと進んで行つた。すると、やがてのことに平らなところへ出た。ペトウローはあたりを見まはしたが、まだ一度も来た覚えのないところだつた。そこまで来るとバサウリユークは立ちどまつた。

「お主の眼の前に三つの丘があるぢやらうが？　この三つの丘に
いろんな草の花が咲くのぢや。だが、お主がそれを一つでも折り
取るのは禁物ぢやぞ。ただ蕨に花が咲いたら、すぐさまそれを掴
むのぢや、そしてお主のうしろでたとへどんなことが起らうとも、
振りかへつてはならんのぢやぞ。」

ペトウローは何か訊ねようと思つたが……見れば——バサウリ
ユークの姿はもうそこには無かつた。彼は三つの丘の傍へ近よつ
た。いつたいどこに花があるのだらう？　なんにも眼には見えぬ。
野草があたり一面に黒々と生ひ繁つて、まるであたりを塞いでし
まつてゐるばかりだ。ところが、やがてのことに天の一角で、ピ
カリと一つ稲妻が閃めいた。と、そのとたんに、彼の眼前には一

面の花畠が現出して、どれもこれも珍らしい、つひぞ見たこともないやうな花で一杯になつた。だが、蕨はまだ、ただの葉っぱだけぢやつた。ペトウローは肚のなかで少し怪しみながら両の手を腰につがへたまま、その前に立ちつくした。

こんなものあ、別に珍らしくもなんともないぢやないか？ 一日に十ぺんだつてこんな草なら見てゐらあな、何が不思議なもんか？ あの悪魔づらめが、ひとを嘲弄からかひくさるのぢやないかしらん？

ところが、見てみると——小さな花の蕾が一つ、だんだん赤らんで来るではないか——さながら生きもののやうに蠢めきながら。まつたくこれは不思議だ！ 蠢めきながら見る見る大きくなつて、

まるで燠おきのやうに赤くなつた。そして小さい星がきらめくやうに火花が散つたかと思ふと何かパチつと音がした——と、彼の眼前には一輪の花がぱつと開いて、さながら火のやうにぐるりの花々を照らしてゐるのだ。

さあ、今だ！ さう思つて、ペトウローは片手をのばした。見れば、彼のうしろからも、やはりその花をめぐけて何百といふ、毛むくじやらかな無数の手がさしのばされた。そして彼のうしろでは何者かがあちこちと駈けまはつてゐるらしい気配がする。彼は眼をつぶつて、その莖をむしり取つたが、首尾よくその花は彼の手に入った。あたりが急にしいんと静まりかへつた。すると、木の切り株のうへに坐つて、まるで死人のやうに色蒼ざめたバサウ

リユークの姿が現はれた。彼は指いつぽん動かさなかつた。両の眼は何ものか、ただ彼にだけ見えるらしいものにむかつてじつと凝らされてゐた。口は半ばほころびてゐたが、なんの応いらへもない。あたりには蠅の羽音ひとつ聞えぬ。いやはや物凄いのなんのといつたら！……ところがその時、さつと一陣の風が起つて、ペトウローは肚の底からぞうつとした。そして、草がさやさやとそよぎ出して、さながら花が互ひに銀鈴を振るやうな細い細い声でささやきはじめたやうに思はれると、樹々は怒号するやうな物凄いな音をたてて鳴りはためいた……。と、バサウリユークの顔は急に生氣を帯びて、その両眼がぎらりと光つた。『やつと鬼婆ヤガめが帰りをつたな！』さう彼は、齒の隙間からつぶやいた。『よいかペト

ウロー、今すぐにお主の前へ凄い別嬪が姿を見せるから、そいつの 大変な別嬪ぢやわい！ さう思ひながら、ペトウローは背筋にぞうつと寒けを覚えた。妖ウエーヂマ女は彼の手からくだんの花をひつたみると、身をかがめて長いあひだそれに怪しげな水をふりかけながら、何か口のなかで呪文を呟やいてゐた。その口からは花が飛び、唇にはぶくぶくと泡が吹きだした。『投げな！』と、老婆は花を彼に返しながら、言つた。ペトウローがそれを投げた。と、なんと不思議なこともあるもので、花はまつすぐに地面へは落ちないで、しばらくのあひだ、闇のなかにまるで火の球のやうに浮いたまま、小舟かなんそのやうに空中を漂つてゐたが、やがて少しづつ低くなつて、最後にかなり遠くの方へ落ちたので、そ

れは罌粟粒よりも小さい星のやうに、やうやくそれと見分けられ
 るくらゐであつた。『あすこだよ！』さう、うつろな嗔がれ声で
 老婆がいふと、バサウリユークは犁すきを渡しながら、『あすこを掘
 るのぢや、ペトウロー、あすこにやあな、お主やコールジュが夢
 にも見たことのないやうな黄金かねがたんまり埋まつてをるのぢや。』
 と告げた。ペトウローは手に唾をして犁をとると、それをぐつと
 土へ踏みこんでは掘りおこし、踏みこんでは掘りかへし、何度も
 何度も繰りかへした……。と、何か固いものに触つた！……。犁が
 カチつと音を立てて、もうそれ以上は通らぬ。その時、彼の眼に
 ははつきりと、鉄板てつばんを著せた小型の櫃がうつつた。で、彼がすん
 でのことに手を掛けてそれを持ちあげようとすると、櫃は地の底

へずるとめりこんでゆくではないか。そして彼のうしろでは、どちらかといへば蛇の匍ふ音に似たやうな笑ひ声でした。『駄目なこつちやよ、お主が人間の血を手に入れるまでは、その黄金かねを見る訳にはいかんのぢや!』さう言つて妖ウエーヂマ女は、彼の前へ白い敷布シーツにくるまれた六つぐらゐの子供をつれて来て、その首を刎ねよといふ相図をした。ペトウローはその場に立ちすくんでしまつた。たとへどんなことがあらうとも、人間の、ましてや罪もない子供の首を斬り落すなどといふことがどうして出来るものか! 彼は赫つとなつて子供の頭に巻かれた敷布シーツを引きはいだ。と、どうだらう? 彼の眼の前に立つてゐるのはイワースではないか。哀れな子供はいたいけな両手を十字に組んで、頭ベを垂れてゐる

のであつた……。狂人のやうになつたペトウローは、短刀を振りかぶつて妖ウエーヂマ女ウエーヂマにをどりかかりざま、まさにその手を打ちおろさうとした……。

鶏の脚で立つた小舎 露西亞の昔噺に出て来る鬼婆の棲家は、森の中に鶏の脚で立つてをることになつてゐる。

「おぬしは、あの娘を手に入れるために、どんな約束をしたのぢや？……」さう呶鳴るバサウリユークの声が、まるで鉄砲だまのやうにうしろから彼の五体に突きとほつた。妖ウエーヂマ女ウエーヂマが片足あげ

て、とんと地面を踏んだ。すると、青い焰が地のなかからたちのぼつて、地下全体がかつと明るくなり、まるで水晶でも出来てゐるやうに、大地の底にあるものが何もかも、手に取るやうに見

え出した。彼等の立つてゐる地面の真下には、櫃や鍋にいれた金貨だの宝石だのが、うづたかく埋蔵されてゐるのだつた。ペトウローの両の眼は燃えるやうに輝やいて……理智の鏡も曇らされた……。まるで正気を失つたもののやうに彼は短刀を拵んだ。無辜の血汐が彼の両眼にはねかかつた……。悪魔の高笑ひが四方からどつとあがつた。醜悪きはまる化生のものが彼の眼前を群れをなして駈けまはつた。妖ウエーヂマ女は首を刎ねられた屍を両手にかかへこんで、狼のやうにその血をすするのでつた……。ペトウローの頭のなかでは何もかもがぐるぐると つた！ 彼はその場から力の限り逃げだした。彼の眼の前はすべてが真紅の光りにつつまれて見えた。すべての樹々が血を浴びて赫つと燃えながら呻いてゐ

るやうに思はれた。空も真赤に灼けただれて揺らめいてゐた……。稲妻のやうな火の玉が眼の中できらめいた。ぐつたりと、精も根も尽き果てて彼は自分の荒ら屋へ駈けこむなり、藁束のやうに地面^{べた}へぶつ倒れてしまつた。そのまま死のやうな睡魔が彼を捉へてしまつた。

二日二夜のあひだ、ペトウローは一度も目を醒さずにぐつつり眠りとほした。三日目になつてやつと夢から醒めた彼は、長いあひだ自分の家の隅々を眺めまはした。何ごとかを思ひ出さうとして躍起になつたが、どうしても思ひ出されない。彼の記憶は、まるで老いぼれた各ん坊の衣囊^{かぶし}と同じで、これつぱかしも絞りだすことが出来ないのぢや。ふと、伸びをした時、彼は足もとで何か

ザラザラと音がするのを耳にとめた。見れば、金貨の袋が二つもあるではないか。やつと、この時、夢のやうに、自分が何か宝を捜してゐたことと、森の中でただ一人、何か怖ろしい目に会つてゐたことを思ひ出した……。だが、何の代償として、またどういふ手段でそれを手に入れたのか——それはどうしても思ひ出すことが出来なかつた。

二つの金袋を見ると、コールジュの心は折れた。『ほんにペトウルーシヤはなんちふ変物ぢやらう！ おらがあれに目をかけてやらなかつたとでもいふのかい？ うちぢや、あれを親身の息子のやうにしとつたでねえか！』などと、老人はまるで齒の浮くやうな出放題をならべ立てたものぢや。ピドールカは、弟のイワー

シが通りすがりのジプシイにかどはかされたことを話したがペト
ウローはイワーシの顔を思ひだすことさへ出来なかつた。そんな
にまで呪はしい化生の物のためにたぶらかされてゐたのぢや。も
う何も躊躇することはなかつた。波蘭人には体のいい肘鉄砲を喰
はせておいて、さつそく婚礼の支度がととのへられた。白い婚礼
麵麩が焼かれたり、布巾ふきんや手巾ハンカチがしこたま縫はれたりして、焼
酎の樽がころがし出されると、新郎新婦は並んで卓子につき、大
きな婚礼麵麩が切られた。四絃琴バンドウーラや鑢シンバル、鉞シンバル、笛コーブザや八絃琴コーブザの樂の
音がとどろきわたつて——歡樂がつづいた……。

むかしの婚礼はとても今時のそれとは比べものにはならなかつ
た。祖父の叔母がよく話したことぢやが、ただもう、やんややん

やといふ騒ぎで！ 娘たちは上を金モールで巻いた、青や赤や桃
 いろのりボンで拵らへた頭飾かんむりをかぶり、縫ひめ縫ひめを赤い絹
 絲でかがつて小さい銀の花形をつけた薄いルバーシユカを身につ
 け、背の高い踵鉄そこがねをうったモロッコ革の長靴をはいて、まるで
 雌孔雀のやうに軽快に部屋ぢゆうを踊りまはつた。また新造たち
 は新造たちで、頂上がすつかり紋金襴で出来て、項うなじのところに小
 さい切れ目のある（そこから金ピカの頭アチーポック 巾アストラハンが覗いてゐたが、
 それには極々ちひさい、黒い仔羊皮の角が前と後ろへ一つづつ
 突き出てゐた）舟型帽カラーブリクをかぶり、赤い飾布クラーパンのついた上等の
 古代絹の波蘭婦人服クントウーシユを着て、勿体らしく両手を脇にかつて、ひと
 りひとり正しい型のゴパツクを踊つた。若者たちはまた、背の高

い哥薩克帽をかぶり、薄羅紗の長上衣スエーデンカのうへから銀絲で刺繍をした帯をしめ、口に煙管パイプをくはへたまま、女たちにむかつて媚びるやうな踊り方をしながら、ときどき戯ざれぐち口をきいた。コールジュまでが若者たちを見ては我慢がなくなつて、寄る年波も忘れて浮かれだした。この老人は酒杯さかづきを頭にのつけて、四絃琴バンドウーラを手にすると、煙管パイプをすばすばやりながら、歌を口ずさみ口ずさみ、ぞめき連のやんやといふ喝采につれて、しやがみ踊りをおつぱじめたものだ。一杯機嫌になると何をやりだすか知れたものぢやない。仮面めんをかぶれば——いやもう、まるで人間の恰好ではない。どうしてどうして、今時の仮装などは、むかし婚礼の時にやつたものとは、てんで比べものにはならんて。当節やるのは、な

んぞといへば、せいぜいジプシイか大露西亞人の真似ごとぐらゐ
が関の山ぢや。ところが、そんなものとは大違ひで、一人が猶太
人に紛すると一人は鬼になつて、最初は接吻しあつたりなどして
ゐるが、そのうちに房チュープ髪ツの掴みあひをおつぱじめる……。まっ
たくどうも！一同は腹をかかへて笑ひころげたものぢや。土耳
古人や韃靼人の服装なりをしてゐる者もある。それがみんな火のやう
にキラキラと光つてをるのぢや……。ところが、そのうちにふざ
けた馬鹿な真似がおつぱじまる……。いやもう、とても堪つたもの
ぢやない！亡くなつた祖父の叔母は、この婚礼の席に列なつて、
とても滑稽な一幕を演じてしまつたものぢや。叔母はその時、な
んでも韃靼風のだぶだぶした衣裳をつけて、酒さかづき杯づきを持ちまはつ

て一同に酒をすすめてゐたさうぢや。すると一人の男が悪魔にでもそそのかされたのか、うしろから叔母のからだへ火酒ウオツカをぶっかけをつたのぢや。するともう一人の別の男が待つてゐたといはんばかりに、即座に火を燧つてそれに点けをつた……。火焰がぱつと燃えあがつた。可哀さうに、叔母はすっかり仰天してしまひ、満座のなかで着物をのこらずかなぐりすてた……。まるで市場のやうに、わつといふぎわめきと、哄笑と、馬鹿さわぎが持ちあがつた始末さ。一と口に言へば、どんな老としより人も未だ曾てこれほど愉快な婚礼には出会つたためしがないといふほどぢやつた。

ピドールカとペトウルーシャとは、まるで殿様と奥方のやうな暮しをはじめた。なに不自由なく、万事につけてきらびやかに：

…。しかし堅気な人たちは二人の暮しを眺めて、かすかに首をふつた。『悪魔から福は来るものでねえだ。』さう彼等は異口同音に言ふのだつた。『正教徒をたぶらかす悪魔からでなくて、どこからあんな富がころげこんで来るものか。いつたいどこからあの山のやうな金貨を手に入れたのだらう？ それに、なんだつてあの男が金持になつたと同じ日に、不意にバサウリユークの姿が消えて無くなつたんだらう？』どうも人の臆測といふものは馬鹿にならんものでな！ 一と月とたたぬうちにペトウルーシャはまるで人間が變つてしまつた。いつたい彼はどうしたといふのか——さつぱり訳がわからん。同じところに坐つたまま、一と言も人とは口をきかず、しよつちゆう物思ひに耽つて、何事かを一心に思

ひ出さうと骨折つてゐるらしいのぢや。どうかしたはずみに、ピ
 ドールカがやつと口をあかせると、妙にきよとんとしながらも、
 すこしは話もして、気分もいくらか晴れるやうなのぢやが、ふと、
 くだんの袋を見ると、『待て待て、どうも思ひ出せんわい！』さ
 う口ばしつて、またもや深い物思ひに沈んで、再び何事かを思ひ
 出さうと一心不乱になるのぢや。時々じつと、長いあひだひとつ
 場所ところに坐つてゐると、いかにも何もかもが初めからあた脳裡まに浮かび
 あがつて来さうな気がするのぢや……が、やはりまたぼうつとし
 てしまふのぢや。どうやら、自分は居酒屋に坐つてゐるらしく、
ウオツカ火酒が運ばれて来る、ウオツカ火酒が舌に焼けつく、ウオツカ火酒はとても
 厭だ、誰かそばへ近よつて来て肩を叩く、その男が……しかし、

それから先きはまるで眼のまへに霧がかかったやうで、とんと思ひ出せぬ。汗が顔からたらたら流れる、彼はぐったりして、その場に居竦まつてしまふのだつた。

ピドールカはありとあらゆる手段てだてをつくした。修験者に相談したり、★怯え落しや癩おさへの呪術まじなひもしてみたが——しかし、なんの験しるしもなかつた。

★ わたしの地方では人が悸病おびえにかかつた時、その原因を知るために『怯え落し』をやる——それには先づ錫か蠟を溶かして水の中へ流しこむのだ。するとそれが病人を怯えさせてるものの姿に似た形を現はす、それで怯えはすつかり落ちてしまふのぢや。『癩おさへ』といふのは吐むかつき気や

腹痛の時にやるもので、それには大麻の切れはしに火をつけてコツプのなかへ入れ、それをば病人の腹のうへに水を盛つて載せた鉢のなかへ、底をうへにして、伏せるやうにして入れる。それから呪文をとなへてから、その鉢の水を一匙だけ病人に吞ませるのぢや。(原作者註)

かくてその夏もすぎた。哥薩克たちの多くは秋の刈り入れをすました。そして生れつき放縦な多くの哥薩克たちはまたもや戦地へと出征した。鴨の群れはまだ土地ところの沼地に群れてゐたが、鷓みそさはもう影も見せなかつた。曠野ステツピは一面に赤くなつた。ここに穀類の禾堆いなむらが、ちやうど哥薩克の帽子のやうに野づらに点々と連なつてゐた。時をり村道を、柴や薪をつんだ荷馬車が通

つてゆくのが眼についた。大地はいよいよ固くなり、ところどころに凍いてが染みとほつた。やがて空から雪がチラチラと落ちはじめ、木々の枝は兎の毛のやうな霜で飾られた。晴れた極寒の日は優雅な波蘭貴族よろしくの姿をした胸の赤い鶯うそが餌を曳つぱりながら雪の上を歩きまはり、子供らはでつかい槌を持つて氷の上を走りまはつて、木の球を追つかけた。一方、彼等の父親たちは楽々と煖ペチカ炉カのうへに寝そべつてゐたが、時をり、吸ひつけた煙管をくはへたまま戸外そとへ出て来ては、いかにも素晴らしい大寒日和をさんざんに褒めものしつたり、または入口の土間で、寝かしてあつた穀物に風を通したり搗いたりするのぢやつた。やがて雪が解けはじめ、梭魚かますが尾で氷を砕いた。だが、ペトウローの容態に

は依然として変りがなく、時と共にいよいよ気むづかしさがつのる一方だつた。足もとに金貨の袋を置いたまま、鎖にでも繋がれたやうに、家の真中に坐つてゐた。髪はぼうぼうと伸び放題で、まるで野育ちのやうに、見るからに怖ろしい形相になつて、絶えず一つのことと思ひを凝らして、何事かを思ひ浮かべようと一心になりながら、それが思ひ出せぬのに焦れたり、怒つたりした。時々、暴々しく席を蹴つて立ちあがると、両手を打ち振り打ち振り、何ものかを捉まへようとでもするやうに、じつと眼を凝らすことがあつた。唇は、何かずつと前に忘れてしまつた言葉を、どうかして口へ出さうとしてあせるやうに、ぴくぴくするのだが――やはり又じつと動かなくなる……。狂暴の発作が襲つてくると、

まるで正体もなく歯がみをして、われとわが手に咬みついたり、苛立ちまぎれに髪の毛を引きむしつたりするが、やがてそれが鎮まると、さながら夢うつつのやうにぼつたり倒れてしまふ。それから又しても回想に耽りはじめて、再び狂暴になり、更に懊惱するのだつた。何といふ怖ろしい天罰だらう？　ピドールカはまるで生きた心地もしなかつた。最初のほどはひとり家にゐるのが怖ろしかつたが、しまひには、可哀さうに、さうした悲しみにも馴れて来た。だが以前のピドールカの面影は跡形もなくなつた。頬のいろざしも微笑も影をひそめて、容色は衰へ、影は薄れて、美しい眼も泣き枯らしてしまつた。一度、さる人が彼女を憐れに思つて、熊ヶ谷に棲んでゐる巫女みこのもとへ行つてみたらとすすめ

た。その巫女はこの世にある限りの、どんな病氣でもよく癒すなほといふので、大変な評判だつた。そこで彼女はいよいよそれを最後の手段にもと、思ひきつて出かけて行つて、いろいろと言葉をつくして、その老婆を伴つて家へ歸つて来た。それは折しもイワン・クパーラの前夜の宵のことだつた。ペトウローは正体もなく腰掛のうへにぶつ倒れてゐたので、その新来の客にはまるで気がつかなかつた。ところが、やがて少しづつ頭をもたげると、相手の顔をまじまじと穴のあくほど眺めた。と、不意に、まるで断頭台のうへに立たされたやうに、からだぢゆうがたがた顫へだして、髪の毛がさつと逆立つた……。そして彼は、ピドールカがひやりとしたほど物凄い声をあげて笑ひだした。『思ひ出したぞ、思ひ

出したぞ！』さう彼は、こをどりをして喚きざま、矢庭に斧を振りあげて、力まかせに老婆をめがけて、はつしとばかり、投げつけた。斧の刃が三寸ばかりも、檜の板戸へ、丁と打ちこまれた。と、老婆の姿はいつの間にか消え失せて、白いシャツを著た七つばかりの子供が頭べをつつまれて家の中ほどに立つてゐる……。敷布シートが落ちた。『イワーシ！』とピドールカが叫んで駈け寄つた。すると幻まぼろし影は足の先から頭の天辺まで、全身血まみれになつて、家ぢゆうを赤い光りで照らした……。びつくり仰天した。ピドールカは入口の土間へ逃げ出した。しかし僅かに正気を取りもどすと共に、良人の身を案じて引つ返さうとしたが、時すでに遅かつた！ 眼の前に戸がぴつたり閉されて、とても彼女の手では開けら

れさうにもなかつた。人々が駈けつけて、戸をどんどん叩いた。戸は外れた。だが、内部なかはもぬけの殻だった！家ぢゆうに煙が立ちこめて、ただ、まんなかのペトウルーシヤの立つてゐた辺にやま一堆の灰燼が残つてゐるばかりで、それから、なほもところどころ余煙がたちのぼつてゐた。一同はくだんの袋をめがけて駈け寄つた。だが、その中には金貨どころか、瀬戸物のかけらがいっぱい詰つてゐるだけであつた。哥薩克どもは釘づけにされたやうに、髭ひとすぢ動かさず、あいた口も塞がらずに、ただ棒だちに立ちつくした。彼等はこの怪異にすつかり怯えあがつてしまつたのである。

それから先きのことはよく覚えてゐない。ピドールカはなんで

も巡礼に出るといつて、父親の遺産を処分したが、数日の後には、果して彼女の姿が村から消え失せた。どこへ行つてしまつたものか、誰ひとり知るものがなかつた。おせつかいな老婆たちの言ふところでは、彼女もペトウローの拉し去られたところへ行つてしまつたのだといふのぢやが、キエフから来た哥薩克の話では、あちらの大修道院で、骸骨のやうに痩せさらばうた一人の尼僧が、絶え間なしに祈祷を捧げてゐるのを見かけたとのこと、その話の模様から推量するに、どうやらそれがピドールカの成れの果てらしかつた。又その話では、誰ひとりとして彼女の口から一と言の言葉も聞いたものがないとのこと、そして彼女は聖母マリヤの御像のために＊縁オクラード飾カチを運んで徒歩で辿りついたとのことぢやが、

その縁飾オクラードには目もくらむばかりに輝やかしい宝石が鏤ばめてあつたといふことぢや。

縁飾オクラード 聖像の顔や手以外の部分を蔽ふ裝飾。

まだこれだけでお終ひではない。化生の物がペトウローを拉し去つた、その同じ日に、ひよつくりバサウリユークが姿を現はしたのぢや。誰もかもこいつの姿を見ると逃げ散つたといふ。村人は、こやつこそ財宝を掠めるために人間の姿に化した悪魔で、汚れた手に財宝を掴むことが出来ん時には、若者をかどはかしてゆく、張本人に違ひないと気がついたのぢや。その年、村人は残らず、土小舎を引きあげて本村へ居を移してしまつたが、しかし、其処でもこの呪はしいバサウリユークのために安息は得られな

つたさうぢや。亡くなつた祖父の叔母がよく談したことぢやが、彼は叔母がオポシユニヤンスカヤ街道の、以前の居酒屋を閉ぢたことで、誰に対してよりもひどく彼女に恨みを抱いて、極力その復讐をしようと企らみをつたのぢや。或る時のこと、村の頭だつた連中が酒場に集まつて、いはゆる身分相応な卓子會議を開いてゐたものでな、その卓子の真中にはかなり大きな仔羊の丸焼が置いてあつた。四方山の話がはずんで、いろいろの變化へんげや奇蹟のことも話題にのぼつた。と不意に——それも誰か一人だけにさう見えたのなら、なんでもないのでぢやが、正しく一同に——仔羊が頭をもたげ、その淫蕩みだらがましい眼まなこが生き返つて爛々と輝やき出したかと思ふと、忽ちのあひだに、黒いごはごはした口髭が現はれて、

一坐の連中の方へ向けてそれが意味ありげにもぐもぐと動き出したといふのぢや。一同はたちどころにその仔羊の首にバサウリュークの面相を見てとつた。祖父は今にもそいつが火酒ウオツカをねだるのではないかと思つたさうぢや……。そこで堅氣な老人連は、矢庭に帽子を掴みざま我が家をさして、先きを争つて逃げ歸つてしまつたとのこと。又これは別の話ぢやが、先祖から伝はつた酒さかつ杯きを相手に、時をり管を巻くことの好きな寺名主が、ある時チビリチビリやりだして、まだ二杯とは傾けんのに、ふと見ると、その酒杯がこちらを向いてこつくりこつくりお辞儀をしてゐる。『ちえつ、勝手にしやあがれ！』つてんで、十字を切るより他はなかつたといふ！……ところがその女房にもやはり変なことがあ

つた。彼女が大きな桶で、ねりこ捏粉をこねにかかるとな、不意にその桶が踊りだしたのぢや。『これ、待て待て！』と呼んでも、いかなこと！ 勿体らしく両手を脇にかつて、しやがみ踊りをやりながら、家の中ぢゆう踊りまはるのぢや……。お笑ひなさるが、祖父たちにはなかなかどうして、笑ひごとどころではなかつたのぢや。アフアナシー神父が、村ぢゆうをまはつて、往還といふ往還におみづ聖水を撒き、*クロピール灌水刷で悪魔ばらひをして歩いたけれど、なんの役にも立たなかつた。依然として長いあひだ亡き祖父の叔母は、夕方になると誰だか屋根を叩いたり壁をひつかくといつて、こぼしたものぢや。

クロピール灌水刷

毛の長い、筆の形をした刷毛で、これに聖水

を浸して人や物に撒りかける。

まだそれだけぢやない！ 現在この村になつてをる土地は、まったく平穩無事のやうぢやけれど、まだそんなに遠い昔のことでもないから、亡きわしの父はもとより、わし自身、今でも覚えてゐるが、その荒れはてた酒場は、その後ながいこと、あの悪魔の後裔すゑめが自分で修復して棲んでをつたので、堅気な人はその側を通ることも避けるやうにしたものぢや。煤によごれた煙突からまつすぐに煙がたち昇つて、帽子がおつこちさうになるくらゐ仰むかなくては見えぬほど高く高く舞ひあがるとな、真赤な燠になつて曠野ステツピぢゆうに散らばつて落ちたものぢや。そしてその悪魔はな——あん畜生のことなど思ひ出すのも忌々しいけれど……その

自分の棲家で、世にも哀れな声をあげて号泣しをるものぢやから、それに驚ろいた鴉の群れが、近所の櫛の森から、これもまた奇怪な叫び声をあげて舞ひあがると、はたはたと翼さを鳴らしながら、空中へ乱れ飛ぶのぢやつた。

——一八三〇年——

青空文庫情報

底本：「デイカーニカ近郷夜話 前篇」岩波文庫、岩波書店

1937（昭和12）年7月30日第1刷発行

1994（平成6）年10月6日第8刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本の中扉には「デイカーニカ近郷夜話 前篇」の表記の左下に「蜜蜂飼ルードウイ・パニコー著はすところの物語集」と小書きされています。

※副題は底本では、「*「#「*」は行右小書き」イワン・クパ

ーラの前夜（×××寺の役僧が話した事実譚）」となっています。
 ※副題の「イワン・クパーラ」に、底本では「異教時代より伝はる季節的祭礼で、六月下旬、夏至の日に当り、日輪を祠る太陽祭。」という訳注が付けられています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号⁵¹86）を、大振りにつくっています。

※「灯」と「燈」、「糸」と「絲」は新旧関係にあるので「灯」

「糸」に書き替えるべきですが、底本で混在していましたので底本通りにしました。

入力：oterudon

校正：伊藤時也

2009年8月6日作成

2014年6月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ディカーニカ近郷夜話 前篇

VECHERA NA HUTORE BLIZ DIKANIKI

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 イワン・クパーラの前夜 (×××寺の役僧が話した事実譚)
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>